

書評『会話・言語・そして可能性：コラボレイティブとは？セラピーとは？』

ハーレーン・アンダーソン著 野村直樹・青木義子・吉川悟訳

金剛出版 2001年

手塚 千鶴子（慶応義塾大学助教授）

この本を読むと、春の霧雨のように優しい雨の洗礼を受ける感じがする。それは言葉による対話の力を信じ、人間の変化と成長への可能性に、患者とともに変化へのプロセスに辛抱よく謙虚に共同参加する、著者アンダーソンの、情と暖かさが静かに伝わるのである。しかしこの一見穏やかなスタンスを支えているのは、対話のもつ可能性にかけ厳しく自己を問い続ける厳しさである。「思いやり」や「優しさ」を理由に、対話から身をひきがちな日本人には驚くことである。専門家としての理論や知識に頼ることは、患者が本当に話したいことを聞く耳を閉ざし、自分が聞きたいことだけを聞く結果になるとの理由で、これを固く禁じ、常に自分のよってたつ前提や解釈、自らの行動を振り返る虚心さを貫き、患者やその家族をはじめ他者からの批判や指摘に耳を傾ける、読む者をして居ずまいを正させる厳しさが、この本には流れている。その底には彼女の、家族療法家として、また若いセラピストを育てる教育者としての実践と、それと緊密につながる研究において、常に著者を捉えてはなさなかつた中心的な研究テーマ、つまり何がセラピーの会話を成功させ、どんなやりとりが会話を挫折に導くか、を自らの事例は無論のこと、多くのセラピーの事例について精細な調査を積み重ねてきたその研究者としての信頼できる誠実さがある。

治療する側の判断で定められたある特定のゴールをめざし、治療される側の認知、語り、ストーリーといったものの、改訂を操作的にめざすのではなく、双方はその対話の行き着く先が見えぬ「不確定性」を共にたゆたいながら、治療者が一心にクライアントに寄り添い、話しに没入し、反応し、質問していく。そのプロセスを続けることで、クライアントの行動、感情、思考の選択の幅が広がるように、対話を続けるコラボレイティブな姿勢を説くのが、この本の骨子である。それは従来の心理療法の価値観や概念を転換させた「哲学」であると、著者アンダーソンは論じ、「哲学的スタンス」「会話のパートナー」「無知の姿勢」といった馴染みない言葉を用い、その理論的背景もふくめ、豊富な例とともに語っていく。この哲学の根底には、合理的客観的に一つの真実を探り出せるという近代の客観的科学主義への批判として生じたポスト・モダンの思想がある。ある状況についての現実、会話を通した人と人との社会的相互作用のなかで構成され、相互作用から独立したただ一つの普遍的客観的ではなく、しかも社会的に構成された現実はその状況に関わった人の数だけ多様だとする社会構成主義へののっっている。芥川『羅生門』を地で行くような多様な現実と解釈の存在を積極的に認め、その現実の多層性を促し、それらが交錯する種々の会話に辛抱よく参与していると、そのセラピーのなかで、クライアントがよりよい生を見つける新たな自己の物語が誕生していくというのが、著者の立場である。

ここでの治療者は、本質的には「会話のパートナー」であり、徹底的に会話のプロセスに身を任せる。この一見行き当たりばったりで無責任とも思える、しかし治療される側にもしっかり責任をなげかえず、コラボレイティブ・セラピーを描き出すこの本の語りくちは、意外と控えめで地味である。がそれにもかかわらず、読む人は、肅然と自分を振り返る気持ちにさせられる。自分を正当化したり防衛する気になるよりは、静かな内なる対話に誘われるのである。一つや二つセラピーであれ日常の人間関係であれ、うまくいかなかったコミュニケーションのエピソードが自然に思い起こされ、ひとしきり想いをめぐらす。その意味でこの本は、単に家族療法の本と限定してしまうのではなく、もっとひろく対人コミュニケーションの本として読むことができるのである。

相手とのオープンなコミュニケーションをあえて封じるような話しの聞き方や質問をたいした疑問も感じずにしてきた現実、しかもコミュニケーションがうまくいかない責任を自分でとらず、問題児であるこどもや、頭の固い上司や、勉強意欲のない学生に押し付け自分の認識を棚あげしてきたことに、愕然としかも肅々と気づかされるのが、この本の素晴らしさである。が同時にごくふつうのありふれたことばのやりとりと思える会話がどれほど素晴らしい成果をうみだしうるか、無自覚的に会話をしている時には決して見えない可能性、コミュニケーションの広がり心踊らされるのも真実である。

たとえば著者の師であり、同僚であり、この本の共同執筆者になるはずであったハーリー・グーリシャンというこれまた伝説的な家族療法家の、ある妄想をかかえた男性患者ラスとのやりとりは圧巻である。この患者は長いこと自分が重病にかかっており、これが他人に移ると相手は死んでしまうと信じ込み、不安と恐怖にとりつかれ結婚生活や仕事にも大きな問題を抱えていた。これまでに医者や病院をあれこれ変えてきたラス、この患者を扱いかねた精神科医から頼まれたグーリシャンは、たった一回の面接を行う。ハーリーが、セッションのなかで「この病気にかかってどのくらいですか？」と聞くと、ラスは驚いて沈黙してしまうが、やがて自分の話を語り始める。そして「自分が語りたように語れたことで、ラスは見る見るうちにリラックスし、生き生きとし始め」たという。この面接をワンウェイ・ミラーの後ろから見ていた同僚たちは、このグーリシャンの質問は、患者の「心気妄想」を強める恐れがあり、「この病気にかかってどのくらいだと思いますか」と聞くべきであったと批判的であったが、患者が病気だといったのであるから、「その病気のことを知りたい」と思い、「知らないという立場からの質問が必要だった」というのである。

これはセラピストの「無知の姿勢」の典型である。つまり「言葉にされたこととされないこともふくめもっと良く知りたいと思う」態度や信念でのぞむと、患者に反論したり、その認識を妄想だからとして変えようとするかわりに、彼自身の「物語的真実」につき添っていくことになり、そうしたプロセスを通して、この患者のなかに新たな意味が生まれストーリーの語り直しができる「余地」が生まれたのだという。そんな「余地」や「隙間」をつくり患者が、「その会話に招かれていると感じさせ、そこに居場所があると感じ」させる言い方、聞き方、質問の仕方が大切なのだという。

これとはまさに正反対のことをわれわれは日頃お互いにやっているのではあるまいか。しかも異文化コミュニケーションにおいては、相手の「物語的真実」がこちらのそれとあまりにも違いすぎると感じられる事が多く、我が真実の正しさに固執し弁護することに一層力がいりやすい。多様な現実の一つとして相手の真実に、耳を傾けることがなんとむずかしいことか。話を聞いてもらえない相手は当然ながら、ますます身も心も固くしこれまた自己の真実の正当性にしがみつく。こうして両者の物語が、歩み寄れる程度に語り直されるゆとりは永遠に閉ざされてしまうことが多い。

広く9.11以降の世界に目を転じてみても、ここにも硬直化した物語は数多く存在するものの、この本が説く対話の可能性の兆しはまだ見えていない。果たしてこの「無知の姿勢」や「コラボレィティブ」なスタンスとは、日常の人間関係から一歩あるいは半歩降りる決断をした人達が選択した、特殊な人間関係であるセラピーだけに通用するものなのであろうか？あるいは、異なる現実間の競争が熾烈をきわめ、論理の力で押しがちな説得的コミュニケーションや独断的モノログがはばを利かせている世界においても、何らかの力を持ち得るのであろうか？持ち得るとしたら、どんな場でどんな風に誰がその力を発揮するのであろうか？そんな期待さえふと抱かせてくれた幸せを、この本の著者と、読みやすく明解な訳を提供していただいた訳者一同に感謝しつつこの書評を締めくくりにしたい。